

## 一九六

か世話をそれもへ近邊の人は喚て梁山泊と云ふくらいの悪ひべき恐ろしヲ、所詮さうをも  
あの頃住職眞學和尚ハアテ一病氣をわづらひまして床お臥せつて居ましたが毎々快方み  
趣き獨り何やら思案して居りました裏の戸あけて訪問て來者のありませ(銀)オイ眞學さん  
居やそか(眞)ア、居るんたゞ誰人だへ(銀)こうや有難へ私でそ銀造でそ(眞)ヤアふきい銀  
造るんをばらくも誰人も居やしねへから上つて緩然とるが宣(銀)まゝびら漫免ねへ暫時  
あの土地ふや旨へ仕事がねへから外へかせきみ往たんだがどうしたへたじろうお前さんの  
お顔の色が悪いじやねへかどうか爲のかねへ(眞)ヨリや見附らきて甚だ面目のねへ話だ  
實はお前も知てるだろう吉野の澤鷺屋も居ふ千代坊(銀)ナニお千代坊ウムどうした(眞)わ  
いつみどうした譯か自己は懶て仕舞て忘へをすそれを困じてふの通りアテ一病氣よ爲た  
のだがわいつど一衾よ寐様な考への出へかのう(銀)ウムそうかののお千代ぼうよついちや  
自己もおの通アお覽あせへ眉間へ疵が出来てるだろう是や皆なる千代ぼうが爲みあう爲た  
お未だ忘らきお實へ惹出みてさんノヤ思め一しかしからなぐさんで女郎よても賣腹慰せそ  
る心組で居ひる(眞)どうかそんならお前もやつぱりお千代の爲めかテモさつても男殺じと  
いわの娘だあおシテうの眉間の疵の來歴はどうしてせうなつたか聞うじやねへか(銀)ウム  
おきもどうも男らしく無から自分で愛想を盡して居る体體だ實へおうじふわけると前回み  
やせし詰しを一通り話して聞せました(眞)ウムそきじや尚更情慾を遂てから腸慰せしなく  
ちやじけねへな銀)オイ眞學様そんなら如斯いふ事よ爲て本望を遂ようじやねへか(眞)ウ  
ム如何いふと云して(銀)よう自己の明輩を二人許り加擔るからお前背折貸金拾圓(銀)ねへ  
か(眞)どうぞるのか明輩よ與てやるのか(銀)無論にそつして四名であつゝと澤鷺屋へ忍  
んで猿轡を嵌て行んで來、そうちへ仕や八里離れた此お寺どきほどお千代坊の泣くもぬめ  
いても安心してお前と兩人で思ふ通と本望を遂るみとが出来るだらうじやねへか(眞)オ、  
、そりや宜都合だ本望さへ遂りヤ十圓位のはした金へ何でもねへ確か與て遣から首尾よ  
く窍んで來與え依頼から(銀)オ、承知した安心して待て居さへと言葉を残して出でて往  
と見送る(眞)言々と本望遂げたいものだと和尚ハ一日三秋の思ひをあして待つて居り  
ます

おふれ十二月の四日の夜恩黨銀造ハ同じ明輩の大目の宇野吉と骸骨吉と小地獄金太と云る

何をも勝り劣りのない悪黨ともを加擔らひまして吉野驛の端所ある大橋屋と云へる怪しひ茶屋へ這入つまらぬ煎しめ者で酒と飲んで居とましだらてうどおの晩の大雪ぶりで浮さりましたから四人の悪事を行ふみに幅強あ晚て傍さりキモト(銀)ヤイ宇野ふ前(よの)前の前の晩澤瀉屋へ拵子(かさき)往たそうざかだな案内をよく知つてゐるだらう(宇野)ウム前の晩は豆盜賊も道入てほんとうの拵子は爲なかつたがそれじや今宵あそへかせぎみ従く了簡か(銀)ウムあ前もあかく感心な男だ豆盜賊ツて誰か床へとろぼうみ往つた(宇野)ウムあのみ前たちも知てるだらうソレ器量美のお崎(銀)ウムそらくあの尻輕か(宇野)あいつの前先月から妾と一所よ寐て吳をつとふからお膳を拵へらせるのを箸を取ねへのは男の恥だそぞよお崎の器量と來ちや瓜實顔(かぶねづかほ)でよんざらでもねへから前の晩徃つて遣つたらたいろう嬉しがつて泣きやがつたよ(金)オイー宇野うねへおのろけ止ねへな(銀)それじやお前はよくわそふの案内を知つてゐるな(銀)ウムそぞにやわのお千代はうの寐て居る處も知つてゐだらう(宇野)ウム大知だそぐお崎の膳坐敷であそおのお神さんと寐て居らア(銀)どうかそれで安心した實はないアノお千代坊みにわれの惚れて居てあいつの爲み如此爲たんだが金

崎はさんく感んでそれから金よじて高飛(たかひる)する了簡で居るからそぞれお前たちを加擔して來んだがみんな一ト骨折(けつき)て吳んねへあそきよの觀音寺の住職奴(うしゆしやく)の千代の爲よわんな悪黨(あつとう)でも懲(こころ)むすらひをして居るからつけあんで往た所首尾よくお千代を窮(きゆう)んで吳(ご)ば金圓を十圓やると言たから自己等(の)一かせきしてかわる(あ)の娘をなぐさんであまりを眞學和尚(まがくじやう)よ遣(けん)そぞから娼妓(さうぎ)よ賣(うり)つて罪(つみ)ハ和尙(わがくじやう)よあそりつけて仕舞(ごはい)さよしか(骸)きそぞは銀造親分(ぎんぞうしんぶん)よく云つたうりや宜(うり)ども往つて遣つけて來よう(金太)そんあら手苦(てぬが)二人でお千代を引(ひ)き二人であ女房(めのわらわ)さんを捕(つか)ひて逃(のが)れ様(よう)なとよ爲(ため)様(よう)宇野(うの)ウムそぞで宜(うり)らう(銀)ヤイお前たち(の)ひなかつて失敗(しほい)らやいけねへよ(金太)なんよ心配(こころば)しなさん十二時の梵鐘(ぼんのう)を合(あつ)團(だん)四人の油漠兒(ゆばり)手拭(てぬぎ)間深(まぶ)雪(ゆき)のあかを跣足(あか)でやつて參(さん)りました

むかふから表面を通る別嬪(べっぴん)の小女(こども)を先(さき)みたて提燈(とうぢん)點(てん)して此方(こちら)へ參(さん)まなそい提燈(とうぢん)よはふとく(おもだかや)と書(か)てあきまして身(み)装(あわせ)は上(うえ)みけんちうの合羽(あわ)を着(き)て下(しも)服(ふく)三枚(さんまい)小袖(こづ)を襟(えり)高(たか)み上げ絆縮縫(ひきゆう)の下(しも)帶(たすき)は時々(ときどき)看(み)まして鼠縮縫(ねこひきゆう)の頭巾(かぶとじん)を間深(まぶ)んで居(ゐ)ましたが銀遣(ぎんてん)よくくく瞞(ま)して看(み)まを紛(まか)せ方(かた)なきお千代(せんじよ)で浮(うき)ますから幸福(めいこう)よしと思(おも)ひ合(あつ)團(だん)の聲(こゑ)をか

はまもとや否や傍木の木影から四人のバラードと出まして突然その婦人と懷を抱かれて千代は直ちに猿轡はませられ女中のアレーと逃ぐる間もあらばおそ大轡と捕まつた小鳥の如く一人の男と遠く投り出させて仕舞ひ起きて見れば最早人影看へがありましたから驚いて澤瀉屋へ斯くと知せて澤瀉屋をへ大いに驚き早速人と戸長の家と警察署へ走らせて訴へましたから警察署でハ巡査警部を四方へ廻して手配り致しました

説話二個よ分をもして四人の悪黨の千代を擋いて往つて觀音寺へ登りましたと眞學和尚待ち兼ねはや酒肴の準備の整のつて居ります(眞)ヤアどうも佛苦勞でわつたまと一杯やるが宜い(銀)オイ眞學さんたいろうな荒療治を遣たから拾圓の金よりもそつと餘計貢ひやせう(眞)懲りの深へあよしく承知したまわ一杯やるが宜い

お千代と思つた婦人の頭巾と取つてオヤまると言ひながら落附拂つて坐るのを看まつてお千代とは思ひのほか姿体も器量もうつぐら似て居ります少一年嵩の増て居る年増こそかあさぞの悪黨もあればと許り難ひ(銀)ヤアよりやお千代ヒヤねへは(皆ノ者)ウムどうおもふんあ間違ひ超だるうか(女)みなまんへとあんばんはありいと云て坐中を看まわしたばかり再度此難就中和尙眞學は呆氣ぬとられて居ましたが果しておまは誰でわざよせうか明晩よ譲をまこと

### ○ 第廿壹回 天網快々疎而不漏

(銀)オイ眞學さんいくつ驚いても何の益もたぬねへからやぶきかと海を喰はゞ皿までと云ふ事がわらへお千代坊のかわづよおの姉さんをたくさんどうたへ(眞)さよ一とうもそう云ふとおろが仕方のねへおの姉さんもお千代坊よりはうつぐら似類から懷しひじやねへか(宇野)ときよ銀遁親父あうしたらどうだへどうせ強姦してやるなら自己等五人で面々聞引して番號順み爲うじやねへか(銀)ウムそきの宜ろう(眞)イヤ自己の金主だから第一の後褒美よ預かるのが當然のおとだ(骸骨吉)イヤおれのむきよ爲んだと争ひ合つて何日はつべやうも傍さりません

憚れむべし一人は姿容俊き美婦人でござりまして他の五人の凶漢は鬼を欺くであられ男いづれも色黒く眼体虚骨へ一癖あるべき顔魂魄も加之よ見ざへ凄う古寺なき普通たいていの婦女なら肝魂魄の自身を離れてひだそら恐怖り外よ詮術は傍さりませんが一個のみの婦

人のと左様と恐怖のる様子もあく落附はらつて居まとのは奈何よも履歴もあり、うな婦人と看へまセ

五人の悪徒はもとより是非善惡を知ぬ奴也へ彼の婦人を争つて居るうちはや腕力がふ任せる様も成まして誰彼の差別あく闘争を初めんとするわうな婦人はきつと思案致しまして仲裁も這入る（婦人）まゆく皆人さんお待ちあさひよし野暮奥ひ前さんたちも悪黨もは似合ないじやあさひませんか婦女の居い島ヒやあし穴はとおへ往ても行さじもとわしらむ相撲の筑井縣たてよ首頸は土地の名物お前さんたちの様も醜男のまだおの土地もあざまそものかその意氣な所と口前の宜所で婦人を口説て傍覧あるい婦女たちは娘がつてふぐふ應そそと廢きなものそれをもア不開化な念佛講あんばとおろの古寺でもその療治は下るらないねへオヤお前さんたちはみんなお黙止でそれへそんならて序よ妻が素生を詰し升かしゆわどつくと耳の穴を壊つて聞いてれ吳妾もとはど問べ武家育ちかはる世間つかはる身の十六歳の春浮氣から男狂ひを爲初めてみの尾張なる町の静岡を跡みて流を渡りは富士川の水の源奈良興美の甲斐の廓で苦界の勤め名は深雪でも朝顔の探節とおろの男子も

は日の無妻の淫樂、症思ふた人と意氣事の情合も吉野の澤瀉屋でえつぱり襦て樂しむいちを思ひがけ無邪間物も言ひはき世間の義理づく藝妓と成てお坐敷へ招きた途由、今夜の始末まづそつと妻のせうれおんあものであさひまよと云へ此方の五人はたゞ驚いてたずひよ顔を見合せて居るはかり婦女再び言様（それもへ妻はしうどうらしくお前さんたちよ恐怖がつて泣ぬめきに致しませんのモシお前さんたちも妻の爲めみひとりの男と極りを附て可愛がつて下るこませがしかしくら狐上りの山猫でも食ふのみわわたしのせいたくみのうち水際のたつたお壹人さんが妻やようほさんとから皆さんそのお心組で願へ升五人の者はじまのお雪が言たおとよ氣が注き目配せ致してありへ、お雪のお氣入り可愛がつて貢人と思ひよわかみ衣紋をそくろひ正坐るやら何やらお雪に可笑て堪へ切せず大笑ひを致しましたおまた自分で印を爲しひたそら五人の者を醉せて後よ逃る考案がのつたと看へまとはじめより諸君がお判断じでござりましたろうの銀造が涉千代と思つて引摺つたハ銀造より不幸でお千代よ取てはごく僕侍であさひまゝ萬一してお千代でありますとお雪の如く艱難辛苦も致しませんから自然お雪の様お仕打より参る兼てからぞ強姦させた

より相違ひざりません是どかと先んずきの人に制せると云ふとお雪のはじめて五のものをふたじよ番でからみをしたからおそ容易五人の悪黨の自由とぞるとい出来ア却つてお雪の爲み綾做されて遂に其身の破滅と及ぶのを知らずす善尺魔と面白うう騒いで居りまそのへまた是非もなきとてあがります

警察署から派出された巡査や探索掛六七人の一連は足跡を追てかねのね日を若けて置ました觀音寺村觀音寺へ參り暫時伺候て看ましと果して五人のものの一婦女を相手といたその強さを致して店舗から合圍の聲と諸共よ戸を蹴破りて這人まして(巡査)御用だぞ神妙と爲ろ(五人)サア大變と逃る(巡査探索)逃ると却つて罪の重いぞ是御用だ神妙と致せ(五人)へニと恐れ入やした尋常と拘引て參りよを決して逃だてれ致しません(お雪)どうも有難う様さらま能くお出でなす(巡査)お前さんと澤瀉屋のお雪さんか(お雪)へ玉るようおほさいます妻のお雪であさじよと(巡査)今宵(月)直と歸るが宜ひ理黨ともハ最綱だから安心して宜ひ借用の在つたとればまた喫から其時またお出で(お雪)やうとおお葉とばざりました跡まつたとおもから一同打連だちてお雪の無事と澤瀉

### 悪黨は巡査とよもよ警察へ引かれました

さてお雪の歸りて主人のおみね妹の千代と銀造と眞學の事と説話ました皆大きよ驚るおもしてひたそられ千代の無難とれ雪の氣動で悪黨共の手と侵されをまた巡査と連られ行かるをば五人の悪黨も最早お千代と仇讐せぬから三方目出觸で大喜悦であざりませ

因みよヤ上を彼の五人の悪黨ともハ一應警察で取調べの上それ相當の處刑と受ましうるより後よりおの者等と就て一條の説話しがあざりませのそれを茲處へ入ては先づ小團圓とぞべき眼の説話しが終局をせんからおれはいつれ第貳編よやとであざりませう

澤瀉屋のお雪お千代の姉妹は一日でも早く安田蘆水の方から音信のあらんあとを願つて居ましたおもひは同じ甲州青柳宿の齋藤源左衛門の娘お蓮は蘆水の歸宅の遲さと併せて日として思はぬ事はなく九月中旬と愛知へ出立もはや其年の十二月の下旬までも本丸の方から沙汰のいませんから常と心配の涙痕と袖を濡して居ました

或る日の事同縣の初鷹驛初鷹學校の教師で新潟縣の士族倉橋光興のひなぐで訪問て參り

ましたよの人に源左衛門夫婦が以前からの懇意あるもの且安田とも朋友よ致して居りま  
そので源左衛門もお蓮も打集い種々の浮世雑談から蘆水の談話も移て参りました(光興)  
ときふ未だ安田君のお歸宅は何時か分辨も成ませか(源左)サア蘆水様は此九月藉のあとで  
愛知へ往ましたる未だ又何處より居やら報知の傍ざりませんから頗る分りませぬ(光)ウム只  
今い何處より店ませか知せんが先月のとて安田様のお説話が新聞へ出ました(源左)エ、新  
聞に出たとてどんな事が出ました(光)言ふや及ばん安田君の不品行でそ(源左)そうして何の  
新聞に出ました(光)なようです確然と甲府の新聞で頭號の學校教員の不品行と題して別  
一欄を設け毎日續き物で出升(運)エ、そりやまたなんだ事で傍ざり升が其の不品行と云の  
はどんな不品行ですか(光)是はサア此九月より家から旅行してから的一條でモ(源左)そりや  
またどんなでモ(光)安田さんの甲府増山町大樹樓の娼妓深雪より前から親昵と重ね同山  
田町の若尾逸平と云る大尽と競争て金圓の爲め深雪はその大尽より身賺され若松町の妾宅より  
店で初めて安田様と出會し夫から深雪の大尽の手と離て同伴より東京へ往心組て其翌晩吉野  
驛の澤寓屋へ泊り込んだ處なんでも其妾の妹とかで安田様の極若いとき野合の者だそうで夫  
の大變の閑着と成たる程なくその主人の仲裁でもとへ回復夫から両婦人を連て東京へ往  
たと云ひ名古屋へ往たと云ひそおまで出ていましたが何よ致しても不品行極まる數員と  
や涉とりませんかねへ源左衛門さん如何です(源左)エ、まあ實に聞けば呆を反つた男では  
ないかおとお蓮やよく聞倉橋さんの言はしやつた事ヒヤヒヤとも樂てぬけねへせ(光)兎も  
角その猥褻なる事ハ沙汰の限際でそどうして那様不品行も成りましたか僕も實に意外の  
事ヒヤヒヤ入りました(蓮)ソリヤ倉橋さんの被仰るおども最も最もでそのそよへ何か子細のわ  
きをうでござるまゝ一暫時思案の躊躇(じしゆ)なよ思ひけんお蓮は何時も似合せで免下  
をひよしと言ひ樂てソット坐を立ち壁障礙(さくあい)も荒々しく襖を開いて出て往きました源左衛門  
門へ頻りよ思案投首心中餘程心配致して居る様子流石の惡心教師倉橋ヒヤモニらあまり安  
田を悪口罵呴せしと後悔して手持無沙汰よ暇を告げて歸宅ましたがふれよりはたして如何  
なる事ヒヤヒヤモセカ次回よ腰(せき)をさせう

○ 第廿二回 妖雲闘而蘆水廻身邊定矣 (小團圓)

茲處ふ南部屋の奥座敷いまじも源左衛門夫婦ハ泣伏お蓮よ向ひ(源左)コレお蓮そなたもさ

だめて分袂の愁氣だらうのどうかあの蘆水さんと夫婦の縁を切て以て頼からむ遠(そ  
りやまた何故でぞ源左)なせではねへあの昨日倉橋さん(さはる)の來詣(きよめぐり)の不品行(ふひんぎやう)新聞  
へまで出様(いわばう)じや實(じつ)ふ私の恥辱(はず)が成る事だものまアそきよ前も心配許りして始終苦勞(くろう)  
へる時(とき)あいぞそきの可愛想(かわいとうう)でならないから云ふのだ蘆水さんの様(よう)な浮薄(ふうはく)あ廢子(ひきこ)を持つと  
利(り)等(とう)の老年(じんねん)又成つて安樂(あんらく)の出来(でき)ないもの老人(じんじん)な子(こ)の世話(せわ)で安樂(あんらく)をるの常(つね)の道(みち)だもの  
お前の私等(わたくし)又孝行(こうぎょう)を尽(つく)して呉れるならあんな人(ひと)止(とど)してわの倉橋さん(くらはし)の様(よう)な信切(しんせき)な人(ひと)を娘(むすめ)  
よ爲(ため)て暮(くら)そとの末(すゑ)の爲(ため)宜(い)よあれお遠(とお)そきだから縁(縁)を切(き)つて呉(ご)れと頼(たの)むのだ

さしき利(り)波(ば)のお遠(とお)も一度(たび)涙(なみだ)み咽(の)んで居(ゐ)ましたが物(もの)の書(かき)を讀(よ)んだふ影(かげ)にてものゝ道理(だり)  
辯(べん)へ貞操(ていそう)の益(えき)を堅固(けんぐ)なつたるお遠(とお)キット思案(おもんべつ)して両手(りょうし)を前(まへ)よ突(つ)

どう思(おも)ひまとかは存(ぞん)じませんが妾(わたくし)の蘆水(らし)さん(わたくし)の外(ほか)よ再度(だいご)の本(ほん)夫(めおと)を持(も)つて簡(かん)なぞはさらへ一涙(なみだ)  
さしきせんそれよまた両親(りょうしん)の蘆水(らし)さんと薄情(はくじょう)と被(ひ)仰(あお)ひまつて妾(わたくし)が思(おも)ひまつてゐあたあと  
浮薄(ふうはく)な人情(じんじょう)で、涙(なみだ)させんかあんな倉橋(くらはし)の言(こと)た事(こと)と本(ほん)眞(まこと)よして心(こころ)と動(うご)かし  
や無駄(むだ)でござらぬなたある去年(さうざん)の正月(せいがつ)よ蘆水(らし)さんの様(よう)な方(ほう)を養(なま)子(こ)よ持(も)つたら未(ま)始(し)終(おひこ)樂(らく)みだぶ  
少(すくな)い徳仰(とくあう)でござらんと慶(きよ)な事(こと)と本(ほん)夫(めおと)を厭(いや)なでは済(すこ)まぬ体(からだ)をほどま  
でぬき難(むづか)しくもつた蘆木(らぎ)さんをひきうち離(はな)れ縁(縁)をようどくぞりやあすきと云(い)て懶(こな)懶(こな)意(い)  
はらなたさまの後(あらへ)節(せつ)守(まつり)舊(きき)妻(めおと)であまがん殊(こと)く両親(りょうしん)と云(い)たの(い)て登(の)り入(は)り必(ひつ)要(うやうや)千代(せんじよ)さひよ相(あわせ)よ  
逸(いつ)遊(ゆう)が升(あが)まじまつた一人(ひと)に大(おほ)樹(じゆ)の深雪(ふかゆき)さんとやらおきひ寄(よ)り最初(はじ)から承(うけ)知(し)て居(ゐ)  
東古(とうこ)の風(かぜ)ひま成(な)せは過(すぎ)越(こ)て去年(さうざん)の一月(いづか)の東延(とうえん)山(さん)を視(み)てお風(かぜ)ふ懶(こな)意(い)とから眼(まなこ)病(びやう)で湯(ゆ)林(りん)  
じや青(せい)櫛(くし)學校(がっこう)の教師(きょうしか)を心(こころ)と爲(ため)つて下(おと)されうの後(あらへ)蘆水(らし)さんが不(ふ)可(か)能(のう)とから眼(まなこ)病(びやう)で湯(ゆ)林(りん)  
泉(いずみ)で招(まね)きはみ妻(めおと)から連(つづ)け抱(いだ)かし上げ蘆水(らし)さんと妻(めおと)ひ寄(よ)り最初(はじ)から承(うけ)知(し)て居(ゐ)  
恥(はず)がなき妻(めおと)がきてぞうく妹(めい)の語(ご)ひゆ夫(めおと)の否(いな)議(ぎ)まで致(いた)しかりとから眼(まなこ)病(びやう)  
は「今年(いと)起(おこ)れ未(ま)だ蘆水(らし)さんと妻(めおと)へなりやあそがむじの艱難(かんなん)苦(くさ)れのへ通(とお)繩(なわ)のどが  
ほ(ほ)う心(こころ)配(あわせ)なれ本(ほん)年(ねん)中(なか)よひお隣(となり)宅(いぢやう)なるお報(ほう)知(し)をわります妻(めおと)の妻(めおと)不(ふ)實(じ)  
いませんとそがむしの他人(たうじん)の言(こと)と誠實(じめい)として蘆水(らし)さんと妻(めおと)を離(はな)れ縁(縁)を少(すくな)い涙(なみだ)  
ぬ妻(めおと)は食(く)ふ水(みず)を方(かた)おも蘆水(らし)さんと對(たい)しを濟(すく)ましめじの信切(しんせき)な倉橋(くらはし)と聞(き)て呆(あつ)ねあわせ  
朋友(ともだち)の情(じやう)とじて其(その)朋友(ともだち)の業(わざ)業(わざ)じむるい事(こと)のあつたましても聞(き)しだしてお庇護(あひご)の當(あひ)

家のスミ道にあがめどりの連と所と遊ぶ来て懲りてる林のことをもと學校放課よりある事  
との事處は慈母はまよひの倉橋おそ歎詞あるほども不品行聞くも娘うき事を誰も  
らか深うき傷のある事と推察致しきたるそれをまあアノ大事くな蘆水さんを娘日をるひはかな  
がそんな事聞耳持かねせん妻はたとひどうあつても蘆水さんの事に生徒思ひ切立せんさう  
を親父さんも慈母さんもよろしくは推察下さざまして妻を不憫と思つてそんな事ハ吉なり  
ようよ爲て芦水さま(源左)さま初めぬ前のお前の議論感服に至じた堪忍して奥を私あ思が  
りたそれとあそ私を安心した(源)アソセキや何とアセんですかそれヒヤ矢張るあた方も蘆  
水さんを離せむ心せなひのである(源左)アソシの前の無き勿論だは實に昨日  
の倉橋の言た事を聞いて突然又顔を赤めて従つたからもトやお前が心が繋がるやうな感  
ひおとへ呼んでお前の丁度を聞たのだもそうじよ風よ堅固な探ならまづ家も沿まるといふ  
もので私はがむどやね本蘆水さんを隠せ間で始めるだろ(源)アソさあやうひく事  
で彼が隠せひたがうるおもは隠せのモ失敬な事をアだば妻の隠せ御車お隠し下ながおも  
からとて機となるとであらじわん

然る處へ襖を開て店の小僧があればたゞしげみ(小僧)日那安田先生お歸宅よ成ました(源左)  
ナニ蘆水さんのお歸宅だとあれお通(れん)まおとよまよ嬉しげヒヤホシいませんか  
(源)岳父さんたゞ今歸りました(源左)ア、蘆水さんお久しぶりお待ち兼であつたお通は毎  
日泣き明して待つて居ました(源左)ア、蘆水さんお久しぶりお待ち兼であつたお通は毎  
日泣き明して待つて居ました(源左)ア、蘆水さんお久しぶりお待ち兼であつたお通は毎  
日泣き明して待つて居ました(源左)阿シテ取り敢へずお雪を千代の事も篤と相談せしる源左  
も起心致しました(源左)ヨリヤお歸宅をお日出度あるおもと(源左)あなたもおもも悲な

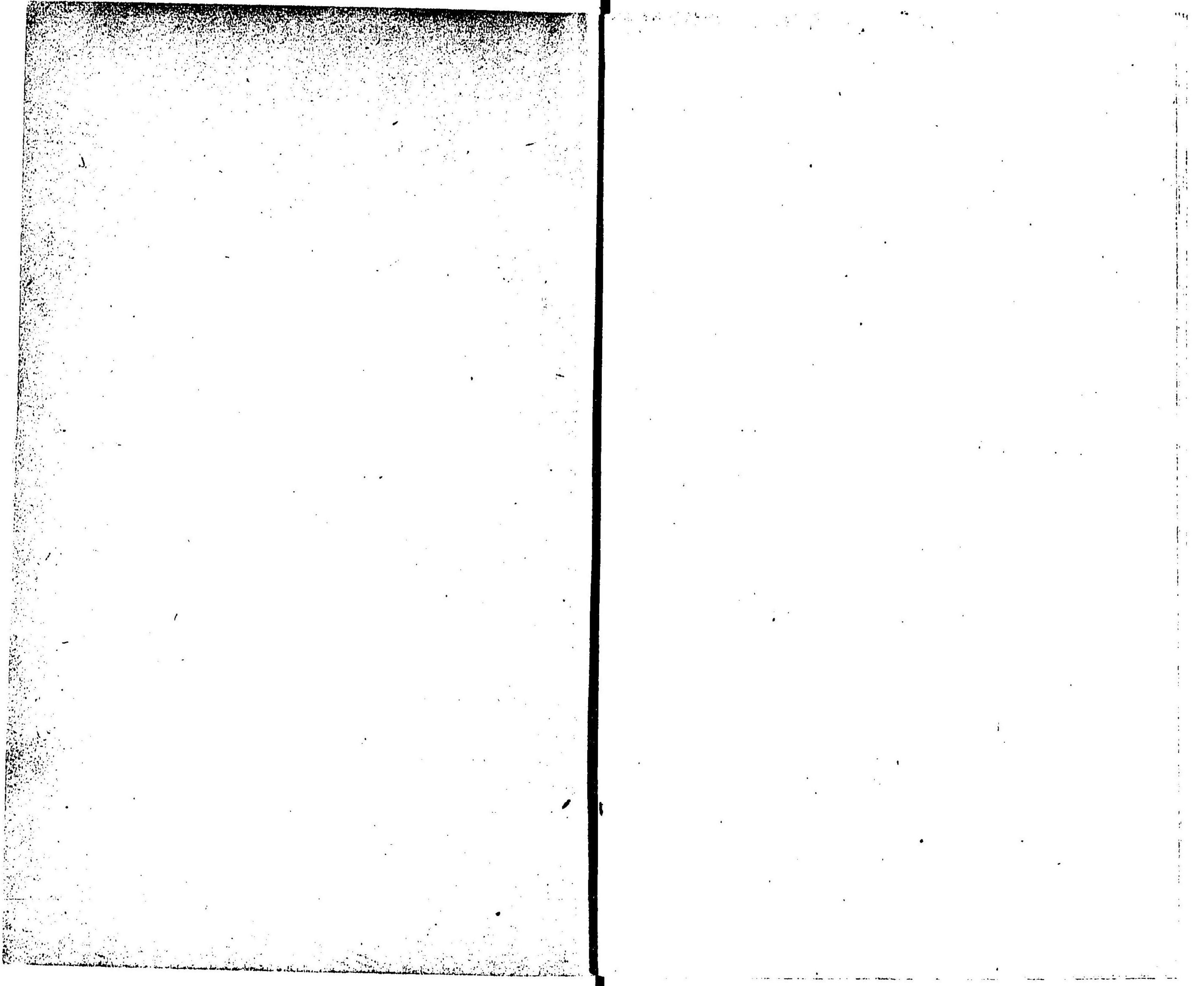
目出度あります

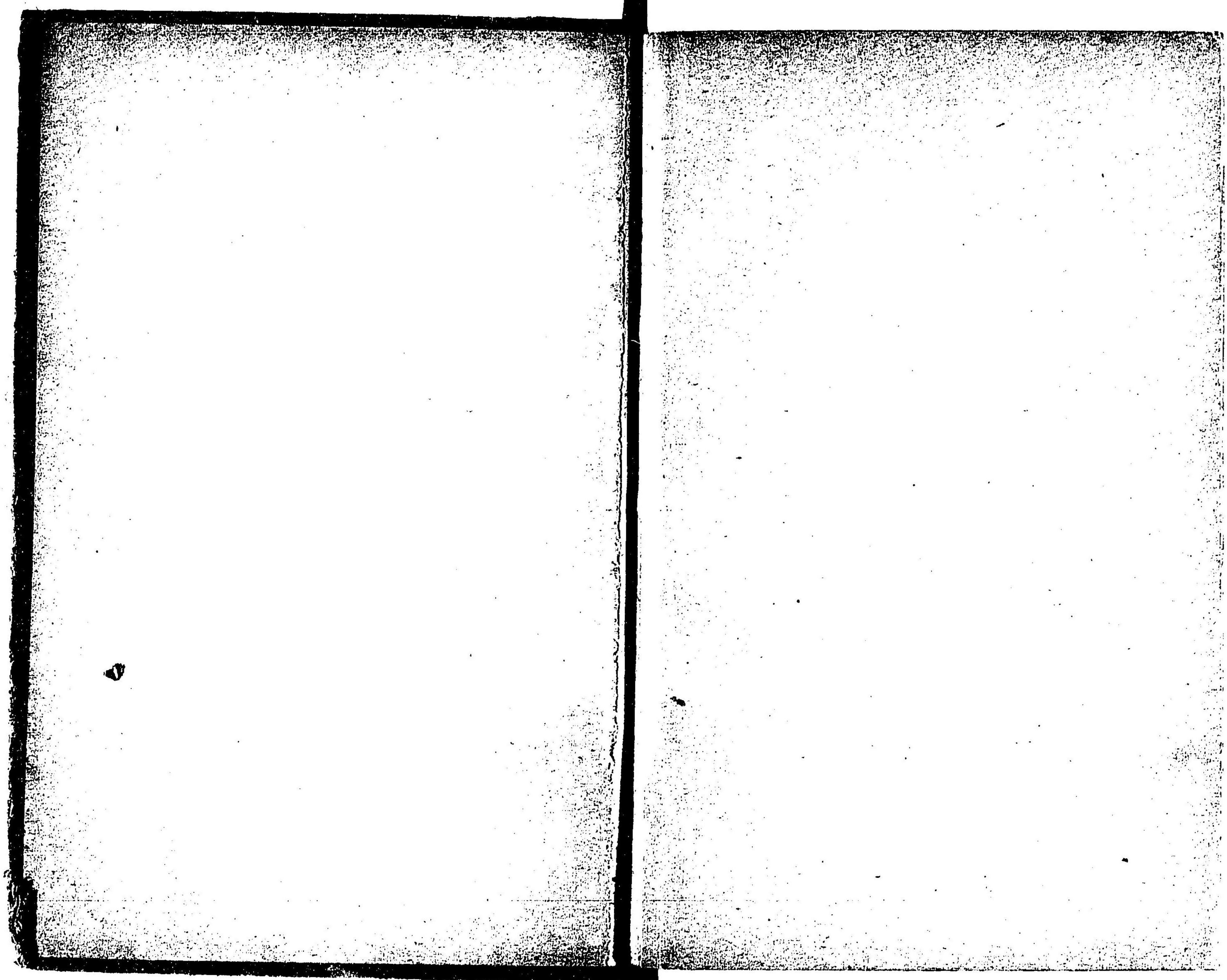
あれから安田蘆水は倉橋の事と聞き一々之返答して辨説もとみなく源左衛門夫婦が連書  
一々其理の明があるみ伏し大いに喜悦て取り敢へずお雪を千代の事も篤と相談せしる源左  
衛門も坐顰なく承知して意よ兩個を蘆水の側へ呼ぶあと定めかねて邊にあら御余思

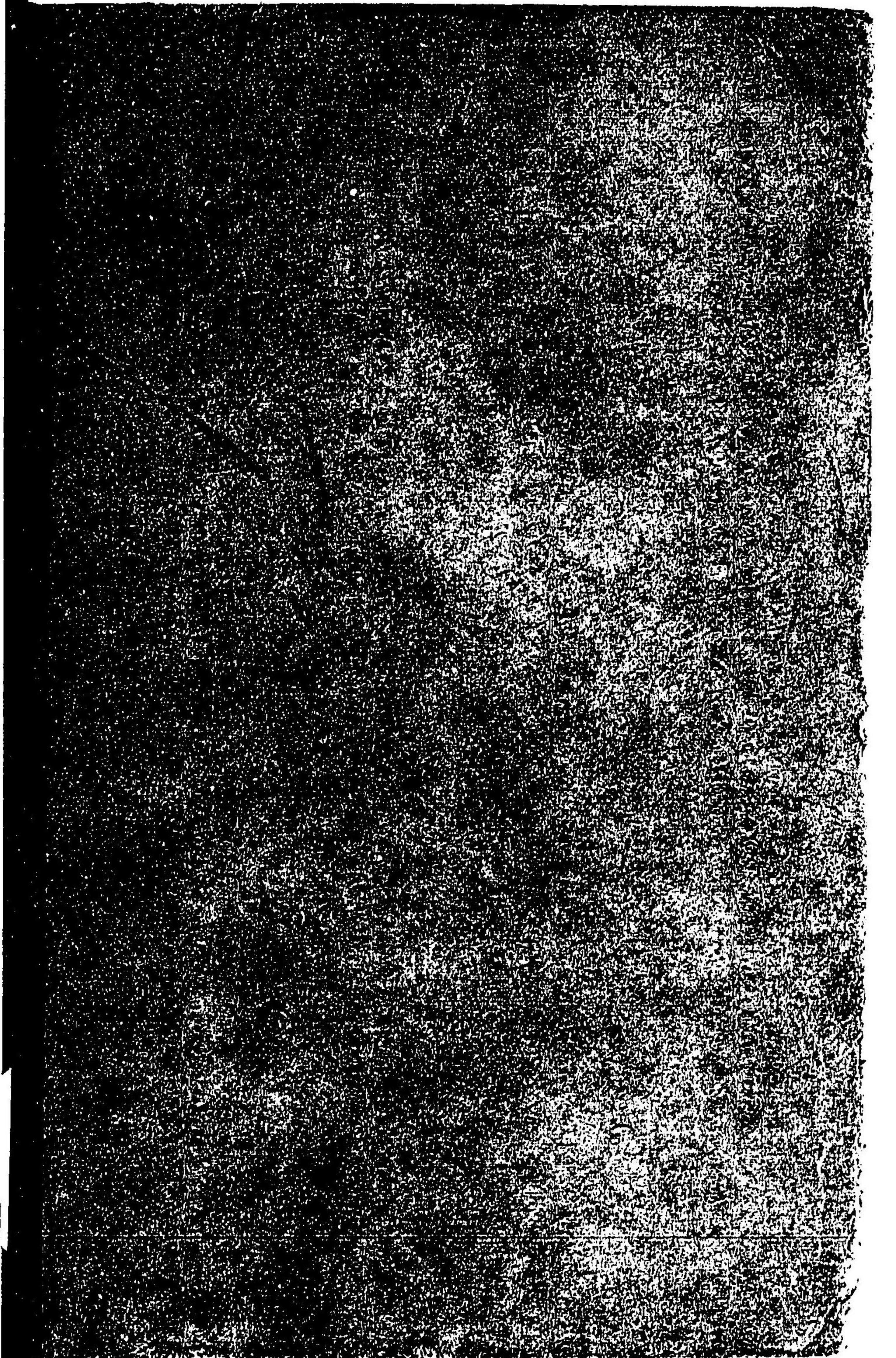
まことに此の子の御意に即合ひ、其の御親切なる御心をうなづかせし。遂に御内閣を承諾せられ、又御内閣より御内閣總理大臣の御親切なる御意をうなづかせし。又御内閣より御内閣總理大臣の御親切なる御意をうなづかせし。又御内閣より御内閣總理大臣の御親切なる御意をうなづかせし。又御内閣より御内閣總理大臣の御親切なる御意をうなづかせし。又御内閣より御内閣總理大臣の御親切なる御意をうなづかせし。又御内閣より御内閣總理大臣の御親切なる御意をうなづかせし。又御内閣より御内閣總理大臣の御親切なる御意をうなづかせし。又御内閣より御内閣總理大臣の御親切なる御意をうなづかせし。又御内閣より御内閣總理大臣の御親切なる御意をうなづかせし。又御内閣より御内閣總理大臣の御親切なる御意をうなづかせし。又御内閣より御内閣總理大臣の御親切なる御意をうなづかせし。

明治十九年一月廿五日版權免許  
同 年七月十四日改題御届  
同 年七月  
同 同同同  
年十一月十四日再版御届  
年同月 再版

演說者 松林伯圓  
筆記者 市東謙吉  
出版人 覚張榮三郎  
東京府平民  
日本橋區本石町  
貳丁目十六番地  
發兌元 上田屋  
同區同所









097666-000-1

特10-719

廻転燈籠

松林 伯円／演述

M20

DBS-1599

